

序

戦後の荒廃より立ち上つての各種産業の発達に驚くべきものがありますが、しかし戦時中の技術的ブランクを急速的に取返すことはわれわれ技術にたずさわるものの願い願つたことであります。特に戦後船舶の不足が心配され、これが復興につき種々なことが行なわれてきましたが、厚板生産の急速なる回復こそ最大の急務とされたのであります。ここにおいてわれわれ厚板生産に直接たずさわる者の技術的交流の必要性が痛感され、昭和30年5月鉄鋼7社を糾合して、鋼材部会厚板分科会の発足を見たのであります。

第1回会合は東京で開催され、八幡製鉄藤木俊三氏を主査として各社委員の間に厚板分科会における研究過程を討論され、初期コースとして大綱がつぎのように決定されたのであります。

1) 総括. 2) 材料. 3) 加熱. 4) 圧延. 5) 齊寸, 剪断, 整理. 6) 製品疵. 7) 熱処理. 8) 品質, 管理. 9) 工程管理. 10) 作業成績および人員配置. 11) 問題点. 12) 編集.

以上につき5年の長きに亘り討論され、われわれの技術発展に大いに資してきたわけであります。

すなわち、第1回は圧延設備ならびに作業概況につき日本鋼管において検討され、従来個別的に僅かに知り得た全国有力会社の厚板圧延設備の概況を把握し得たのであります。ついで第2回は富士製鉄にて圧延機設備、ロール、軸受、最大寸法、ローリングスケジュール等について発表されました。圧延機の差はあるけれどもおのおのの長い経験の中より生み出された特徴に興味をもたれたのであります。

第3回は八幡製鉄で開催されましたが、操業法における製品寸法の偏差、標準作業、ロール組替法、圧延作業の成品形状におよぼす影響、品質能力の向上対策、矯正作業について討論されました。特に製品寸法の偏差、寸法公差の検討は各社圧延機の特性をうかがい知ることができ、圧延作業の改善に多大の効果があつたのではなからうかと思ひます。

第4回は川崎製鉄で行なわれましたが従来まちまちになりがちであつた書類様式も漸次その体裁を整えいよいよ意義ある分科会へと発展してきたのは喜ばしいことであります。この回は剪断、整理関係の議題で Shear bow の結果に興味を持たれました。第5回は北海道日本製鋼にて開催され、研究議題は加熱関係に進みましたが、各社が炉の特性を生かし、作業の標準化に特に努力されていることに感心させられ、特に日本製鋼のバッチ炉の操業には各社大いに興味をひかれたことと思ひます。

厚板分科会も回を重ねるとともに、その存在意義をさらに深め、新しく参加を希望する会社もありましたが、第6回三菱製鋼における会議の席上新しく中山製鋼および尼崎製鋼の参加を認めることとなりました。ただ惜しむらくは第1回より主査を勤められた藤木俊三氏が病にたおれられ、臨時に八幡製鉄嶺次男氏が主査を勤められました。

第7回は新たに中山、尼崎、両製鋼の参加を得て大和製鋼において行なわれ、設備近代化に伴なう管理組織の発展を知ることができました。そしてここに当初に予定された全スケジュールを終了したのであります。途中、用語の統一を期するため小委員会を開催し、各社の作業の理解に非常に役立つのであります。

顧みると5年の長きに亘り討論されました技術の問題点が実に大きく、現在、世界の驚異ともいわれる日本工業の発展特に厚板設備の更新に役立つと確信するものであります。技術の進歩は日進月歩ではありますが、それは過去の研究研鑽の基礎の上に築かれるものであり、ここに編集されたそれらの集積が必ずや将来への発展への基盤となり得ると信ずるものであります。

現在すでに大型四重圧延機や、連続圧延機が各地で稼働していますがわれわれはさらにこれについて技術検討を進め世界水準を遙かに抜く厚板技術の完成へ邁進せねばなりません。

最後に臨み、本報告書の発行に当り、初回より主査を勤められた八幡製鉄、藤木俊三氏ならびに嶺次男氏を始め厚板分科会各委員、また貴重なる資料の発表を御許可下された関係各社、さらにその編集に当たられた編集委員の方々に対し深甚なる謝意を表する次第であります。なおこの報告書は厚板分科会関係者には勿論、有益なる資料であることは信じて疑わないものであります。今後の技術発展のいくばくかの資料ともなり得れば幸甚と存じます。

昭和36年4月

鉄鋼技術共同研究会 鋼材部会 厚板分科会

主査 鍵山正則

鋼材部会厚板分科会委員

昭和35年11月現在

部会長		平世 将一		旧委員および幹事	
主査	八幡製鉄株式会社(八幡)	鍵山 正則	部会長	富士製鉄株式会社(本社)	内川 悟
委員	尼崎製鉄株式会社(尼崎)	遠藤 鉄夫	主査	八幡製鉄株式会社(八幡)	藤木 俊三
〃	川崎製鉄株式会社(葺合)	大木 宏	〃	〃 (八幡)	嶺 次男
〃	株式会社中山製鋼所(本社)	上原 孫一	委員	日本鋼管株式会社(本社)	大住三喜生
〃	日本鋼管株式会社(本社)	高野 広	〃	〃 (本社)	高畑 幸男
〃	〃 (鶴見)	勝江 正満	〃	〃 (鶴見)	高橋 明
〃	株式会社日本製鋼所(室蘭)	館野 万吉	〃	株式会社日本製鋼所(室蘭)	鍵和田暢男
〃	富士製鉄株式会社(広畑)	河野 耕二	〃	富士製鉄株式会社(本社)	八部 祐一
〃	三菱製鋼株式会社(長崎)	曾木 武光	〃	〃 (広畑)	野田 郁也
〃	大和製鋼株式会社(大阪)	小樋喜三郎	〃	大和製鋼株式会社(大阪)	大窪 清
〃	八幡製鉄株式会社(八幡)	大脇 武雄	〃	八幡製鉄株式会社(本社)	鍵山 正則
〃	〃 (本社)	太田 隆美	〃	〃 (本社)	工藤太良男
幹事	八幡製鉄株式会社(本社)	京井 勲	〃	〃 (本社)	戸田 健三
〃	富士製鉄株式会社(本社)	野村 正弘	〃	〃 (八幡)	永江 賢吉
〃	通商産業省(重工業局)	安達 甲一	幹事	八幡製鉄株式会社(本社)	鍵山 正則
〃	日本鉄鋼協会	田鍋 力	〃	富士製鉄株式会社(本社)	八部 祐一
〃	日本鉄鋼連盟(調査局)	吉田 道一	〃	日本鉄鋼連盟(調査局)	樫淵 隆